梅花女子大学心理こども学部紀要:学術論文, 14:1-13

小学校音楽科における鍵盤楽器の運指指導に関する一考察

A study on the teaching of keyboard instrument fingering in elementary school music studies

大西隆弘
ONISHI Takahiro

要旨

保育者及び教員養成校においてピアノ経験のない入学者が増加傾向にあり、ピアノ指導において初心者への対応が大きな課題となっている。たとえ初心者であっても、誰もが小学校からの音楽の学習において鍵盤ハーモニカ等の鍵盤楽器の演奏を経験しているはずであるが、初心者の多くは基本的な手の置き方や指の動作が身についていないのが現状である。基本的な手の準備や運指は、学習を継続する中で習慣として身に付いていくはずのものである。

そこで本論では、まず小学校音楽科の学習指導要領における鍵盤楽器の指導にかかわる部分について、内容や使用する楽器、教材等について整理を行い、次に教科書から鍵盤楽器を使用する楽曲を取り上げて分析し、鍵盤楽器の学習の流れを確認しながら各楽曲での指導上の注意点について考察を行った。そして、合理的な運指の習慣を身に付けるためには何が必要かを明らかにした。

キーワード：小学校音楽科，鍵盤楽器，運指

１．はじめに

近年、保育者及び教員養成校においてピアノ経験のない入学者が増加傾向にあり、ピアノ指導において初心者への対応が大きな課題となっている。経験者と比較すると読譜力の差が大きく、読譜力の向上とピアノ演奏技術の効率的な習得を可能とする指導法の確立が課題として挙げられる。

さて、ピアノ指導において重要な観点の一つは、合理的な運指の習慣付けである。ピアノを演奏する際、どの様な楽曲であっても誰もが必ずと言って良いほど運指の問題に直面するだろう。運指の重要性については、多くのピアニストやピアノ教育者がその著書の中で述べており、運指の良し悪しによってミスタッチが多くなったり十分な音楽表現ができなくなったりと、運指が演奏に及ぼす影響はかなり大きいと言える。また、筆者の経験から、不確定な運指で練習を継続してもなかなか思うように弾けるようにはならない。つまり、将来的に長くピアノを演奏していく保育者や教師を目指す学生が、合理的な運指の習慣を身に付けることは重要な課題であると言えよう。運指については、長くピアノを習っていくうちに自然とその習慣が身に付いていくものである。もちろんピアノは全ての人が幼少期から習うものではないが、小学校音楽科の授業において誰もが鍵盤楽器の演奏を経験する。鍵盤楽器を演奏する際には、たとえ小学生であっても、その楽器の基本的な奏法については学ぶはずである。しかし、筆者は初心者への指導の中で、5 本の指を全て鍵盤上に置くという基本的な手の準備や、指くぐりや指またぎなどの基本的な動作ができない学生が多く存在することに日ごろから疑問を感じている。これは小学校からの学びの中で、それらの基本的な奏法が定着していないことの表れではないだろうか。基本的な手の準備や指の動作がうまくできていないと運指が定まらず、旋律を美しく弾くことが困難になることは明らかである。

ピアノ指導において運指の指導は重要であるが、小学校での鍵盤ハーモニカの指導においても運指指導が重要であるとの研究結果が報告されている。平塚・島畑(2016)は、小学校 1・2 年生を対象とした、運指を児童に考えさせるという授業実践を通して、運指を定着させることが演奏の上達につながることを明らかにしている。奥田(2018)も、授業実践を通して「指番号を用いた演奏の定着を目指すことは、低学年の鍵盤ハーモニカの学習において有効」であると述べている(奥田, 2018, p.72) 。つまり、鍵盤楽器の学習において正しい運指で練習を行い、その運指を定着させることが上達へと繋がるのである。小学校からの鍵盤楽器の学びの中で正しい運指での演奏を継続することで、合理的な運指の習慣が身に付くのではないだろうか。

そこで本論では、まず小学校音楽科の学習指導要領における鍵盤楽器の指導にかかわる部分について、内容や使用する楽器、教材等について整理する。その後、教科書から鍵盤楽器を使用する楽曲を取り上げて分析し、鍵盤楽器の学習の流れを確認しながら各楽曲での指導上の注意点について考察を行う。そして、合理的な運指の習慣を身に付けるためには何が必要かを明らかにする。

２．小学校音楽科における器楽

平成 29 年告示の小学校音楽科学習指導要領に、器楽に関することがどのように定められているのかを整理する。

まず、器楽の内容については以下のように記載されている。(小学校学習指導要領解説音楽編, p.22-23)

各領域及び〔共通事項〕の内容

Ａ　表　現

(2) 器楽の活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。

器楽の活動は，楽器で，曲の表現を工夫し，思いや意図をもって演奏するものである。器楽分野の内容は，次のように構成している。

ア　曲の特徴にふさわしい器楽表現を工夫し，思いや意図をもつこと。(思考力，判断力，表現力等)

イ　次の(ｱ)及び(ｲ)について理解すること。(知識)

(ｱ) 曲想と音楽の構造との関わり

(ｲ) 多様な楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わり

ウ　思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ｱ)から(ｳ)までの技能を身に付けること。(技能)

(ｱ) 聴奏・視奏の技能

(ｲ) 音色や響きに気を付けて，楽器を演奏する技能

(ｳ) 音を合わせて演奏する技能

ここでは育成すべき資質・能力が具体的に示されているが、鍵盤楽器の奏法や運指については直接的に言及されていない。しかし、鍵盤楽器を用いて「曲の特徴にふさわしい器楽表現を工夫」したり、「思いや意図に合った表現」をしたりするためには、奏法や運指の問題は避けては通れない非常に重要な課題である。

次に、器楽の活動において使用する楽器について以下のように示されている。(小学校学習指導要領

解説音楽編，p. 131）

内容の取扱いと指導上の配慮事項

(5) 各学年の「Ａ表現」の(2)の楽器については，次のとおり取り扱うこと。

ア　各学年で取り上げる打楽器は，木琴，鉄琴，和楽器，諸外国に伝わる様々な楽器を含めて，演奏の効果，児童や学校の実態を考慮して選択すること。

イ　第１学年及び第２学年で取り上げる旋律楽器は，オルガン，鍵盤ハーモニカなどの中から児童や学校の実態を考慮して選択すること。

ウ　第３学年及び第４学年で取り上げる旋律楽器は，既習の楽器を含めて，リコーダーや鍵盤楽器，和楽器などの中から児童や学校の実態を考慮して選択すること。

エ　第５学年及び第６学年で取り上げる旋律楽器は，既習の楽器を含めて，電子楽器，和楽器，諸外国に伝わる楽器などの中から児童や学校の実態を考慮して選択すること。

オ　合奏で扱う楽器については，各声部の役割を生かした演奏ができるよう，楽器の特性を生かして選択すること。

このように、第１学年より旋律楽器としてオルガンや鍵盤ハーモニカ等の鍵盤楽器を使用するように定められている。さらに次の解説が加えられている。（小学校学習指導要領解説音楽編，p. 131-132）

イの事項は，第 1 学年及び第 2 学年で取り上げる旋律楽器の選択について示したものである。

ここでは，視覚と聴覚の両面から音を確かめつつ演奏できる各種オルガン，同じく視覚と聴覚の両面から音を確かめつつ演奏でき，息の入れ方を変えることによっていろいろな音色を工夫することができる鍵盤ハーモニカなど，児童にとって身近で扱いやすい楽器の中から，児童や学校の実態に応じて選ぶようにすることが大切である。

ウの事項は，第 3 学年及び第 4 学年で取り上げる旋律楽器の選択について示したものである。

ここでは，第１学年及び第２学年で取り扱ってきた楽器を含めるとともに，指使いや呼吸，タンギングなどを工夫して，楽しんで音をつくることができるリコーダー，また，各種オルガンやアコーディオン，ピアノなど，主旋律の演奏から和音を用いた演奏や低声部の充実にまで幅広く活用することができる鍵盤楽器や， 箏など，無理なく取り組むことができ，我が国の音楽のよさを感じ取れる和楽器の中から，児童や学校の実態に応じて選ぶようにすることが大切である。

エの事項は，第 5 学年及び第６学年で取り上げる旋律楽器の選択について示したものである。

ここでは，第 4 学年までに取り扱ってきた楽器を含めるとともに，各種の電子楽器，和楽器，管楽器，弦楽器などや諸外国に伝わる様々な楽器の中から，児童が興味・関心をもち，豊かな器楽の表現を楽しむことができるものを，児童や学校の実態に応じて選ぶようにすることが大切である。

鍵盤楽器の選択について、第１学年及び第２学年では視覚と聴覚の両面から音を確かめることができるもの、第３学年及び第４学年では主旋律だけではなく和音や低音部パートにまで活用できるもの、第５学年及び第６学年では豊かな器楽の表現を楽しむことができるものが望ましいとされている。

最後に、器楽教材について各学年の内容の取扱いの(2)として次のように示されている。

＜第 1 学年及び第 2 学年＞

主となる器楽教材については，既習の歌唱教材を含め，主旋律に簡単なリズム伴奏や低声部などを加えた曲を取り扱う。（小学校学習指導要領解説音楽編，p. 54）

＜第 3 学年及び第 4 学年＞

主となる器楽教材については，既習の歌唱教材を含め，簡単な重奏や合奏などの曲を取り扱う。（小学校学習指導要領解説音楽編，p. 83）

＜第 5 学年及び第 6 学年＞

主となる器楽教材については，楽器の演奏効果を考慮し，簡単な重奏や合奏などの曲を取り扱う。（小学校学習指導要領解説音楽編，p. 112）

そして解説では教材の選択について、第 1 学年及び第 2 学年では「主旋律に加えるリズム伴奏が児童の実態に応じた平易なものであり，曲の雰囲気を感じ取りやすいものを主に取り上げるようにすること」（小学校学習指導要領解説音楽編，p. 54-55）、第 3 学年及び第 4 学年では「音楽の構造や楽器の組合せなどが児童の実態に即したものであり，和音の響きを聴き取りやすく，楽しく表現できる曲であること」（小学校学習指導要領解説音楽編，p. 84）、第 5 学年及び第 6 学年では「音楽の構造や楽器の組合せなどが児童の実態に即したものであり，和音の響きを聴き取りやすく，楽しく表現できる曲であること」（小学校学習指導要領解説音楽編，p. 113）が大切であると述べられている。つまり器楽の教材は、低学年では主旋律、リズム、低音部等で構成されていて曲の雰囲気を感じ取りやすいもの、中学年以降では和音の響きが聴き取りやすくて楽しく表現できる重奏や合奏の曲を児童の実態に合わせて選ぶこととされている。さらに高学年では、中学年の内容に加えて楽器の演奏効果を考慮することが加えられている。

３．各学年の鍵盤楽器指導で扱う楽曲と指導内容

これらを踏まえて実際の教科書で鍵盤楽器を演奏する際の手の動きに着目しながら学習の流れを確認していく。教科書は教育芸術社の「小学生の音楽」を使用することとする。なお、教科書に括弧付きで記載されている楽器は省いて分析、考察を行う。

・第１学年

〈学習の流れ〉

第 1 学年では鍵盤ハーモニカを使用し、初めに楽器の構え方について学ぶ。腕や肩の力を抜くこと、吹き口は歯で噛まずに唇で軽くはさむこと、鍵盤を押さえる指は軽く曲げることなどが記されている(p. 32)。次に鍵盤ハーモニカで演奏した楽曲を鑑賞して、楽器の音に親しむ(p. 33)。次に「たのしくふこう」(p. 34-35)では歌に続けて自由にいろいろな音を出して、音の高低や長短、強弱、単音と重音など、様々な音を見つける。続く「どんぐりさんのおうち」(p. 36-37)では、黒鍵の「2 つのおやま」「3 つのおやま」など、鍵盤の配置を理解して c 音と g 音を演奏する。「どれみであいさつ」(p. 38-39)で指番号が初めて登場し、c, d, e 音を第 1 指～第 3 指で演奏する。「なかよし」(p. 40-41)では、c 音から g 音までの音を第 1 指から第 5 指で演奏する。「なかよし」に加えて、教師の歌をまねて鍵盤ハーモニカを演奏することで c 音から g 音の鍵盤の場所を覚える。その後、「きらきらぼし」(p. 56-57)「とんくるりんぱんくるりん」(p. 68-69)「こいぬのマーチ」(p. 70-71)で鍵盤ハーモニカを使用するが、全て c 音から g 音の部分を演奏するようになっている。「きらきらぼし」と「こいぬのマーチ」では a 音が出てくるが、a 音を含む部分は鉄琴で演奏する。

つまり、第 1 学年では低い c 音から高い c 音までの音を学習するが、鍵盤ハーモニカでは c 音から g 音までの音しか演奏しない。

〈指導上の注意点〉

音と音階や鍵盤の配置を理解したうえで 5 本の指で c 音～g 音を演奏するが、その際に、5 本全ての指をそれぞれの鍵盤上に用意して、その状態を保ったまま演奏するように指導しなければならない。腕や肩の力を抜いて指は軽く曲げるようにとの記載があるが、これだけでは不十分であろう。手の形を保持したまま打鍵をするためには、打鍵した際に指が開かないようにする必要があり、そのためには打鍵する指のみを動かすこと、必要以上に強く打鍵しないことが条件となる。5 本の指が常に c 音から g 音の鍵盤上に置かれている状態で演奏できるようになっておくことが、第 2 学年で学ぶ手のポジション移動をスムーズに行うことへと繋がる。

曲名	ポジション	学習内容
たのしくふこう	指定なし	鍵盤ハーモニカの音の特徴把握
どんぐりさんのおうち	指定なし	c, g の鍵盤の場所、鍵盤配置の理解
どれみであいさつ	c, d, e=1, 2, 3	c, d, e の鍵盤の場所、運指理解、 1, 2, 3 指の動き
なかよし	c~g=1~5	c ~g の鍵盤の場所、1~5 指の動き
きらきらぼし	c~g=1~5	c ~g の鍵盤の場所、1~5 指の動き
とんくるりんぱんくるりん	c~g=1~5	c ~g の鍵盤の場所、1~5 指の動き
こいぬのマーチ	c~g=1~5	c ~g の鍵盤の場所、1~5 指の動き

(表 1)第 1 学年の学習内容

・第 2 学年

〈学習の流れ〉

まず「かっこう」(p. 22-23)で c 音から g 音までの音で 1 曲を通して鍵盤ハーモニカで演奏する。音の長さ(4 分音符と 2 分音符)に注意して旋律を奏する。「かえるのがっしょう」(p. 24-25)では、手のポジション移動を学ぶ。第 1 指～第 4 指を使用して c 音～f 音の位置から e 音～a 音の位置へと 3 度移動する。教科書では、ポジション移動の際に親指の位置に注意するように書かれている。また、2 組に分かれて追いかけっこをして、旋律の重なりを感じる。「ぷっかりくじら」(p. 26-27)では第 5 指を使用するものの、手のポジション移動は「かえるのがっしょう」と同様である。2 回出てくる「み・み・みみみ・」をまず第 1 指で奏し、2 回目は第 3 指で奏する。2 回目も第 1 指で演奏することが可能であるが、初めの 4 小節は e 音から a 音のポジション、続く 4 小節は c 音から g 音のポジションとして、4 小節の旋律のまとまりを意識するという意図が読み取れる。「山のポルカ」(p. 36-37)では、2 パートに分かれて演奏する。第 1 パートは e 音から a 音、第 2 パートは g 音から高い c 音のポジションである。ここでも親指を置く位置に注意するように記載されている。どちらのパートも第 5 指は使用しない。8 分音符が登場し、拍の流れに乗って演奏する。ここでは 2 パートに分かれることでポジション移動をなくす意図が読み取れる。これは新出の 8 分音符での演奏、つまり早い動きに集中させるためであると推測できる。「こぎつね」(p. 56-57)では、8 分音符で第 1 指～第 5 指まで使用し、且つ手のポジションも 4 度移動する。「なべなべそこぬけ」(p. 60-61)では鍵盤ハーモニカを伴奏楽器として使用する。この曲は、器楽ではなく音楽づくりの教材となっている。「こぐまの二月」(p. 64-65)の鍵盤楽器パートは、鍵盤ハーモニカではなくオルガンやキーボードなどを使用する。また、低音楽器のパートでも鍵盤低音楽器が想

定されている。この 2 つのパートはどちらも c 音～g 音のポジションで、ポジションの移動もない。この曲のねらいは他のパートを聴きながら演奏することであるため、技術的には容易に演奏できるようになっているのであろう。つまり、ここでは聴きながら弾くこと、3 パートの音の重なりを感じながら演奏することが重要である。そして「アイアイ」(p. 76-77)では、5 パートの合奏となる。

つまり、第 2 学年では、低い c 音から高い c 音までの音を 4 度までの手のポジション移動を用いて演奏する。

〈指導上の注意点〉

「かえるのがっしょう」において手のポジション移動の際に親指の位置に注目させるように記載されているが、親指だけではなく 5 本の指が e 音から h 音に移動するように指導すべきである。つまり手の形を保持したまま水平方向に鍵盤 2 つ分だけ右へ移動させる。「山のポルカ」においては同音の連続が出てくるが、この同音の連続を指で切るか息で切るかによって指の使い方が大きく異なる。しかし、教科書にはその点ついての記載はない。児童の実態に合わせた指導が必要になるものと思われる。「こぎつね」におけるポジション移動は非常に困難なものであると推測できる。その理由は 3 つあり、一点目は初めての 4 度の移動であること、二点目は 8 分休符の間に素早く移動する必要があること、三点目は移動後に使用する指が第 3 指であることである。「かえるのがっしょう」においては、4 分休符の間に 3 度の移動で、移動後に使用する指は第 1 指である。そのため教科書には親指の位置に注意するように記載があった。しかし「こぎつね」では移動後に使用するのが第 3 指であるため、親指の位置を意識することは困難であろう。この解決策の一案として、鍵盤の並びに着目して隣の鍵盤へ進むように意識をさせることが考えられる。つまり、移動直前は g 音を弾いており、移動直後は a 音であるため、第 5 指で弾いている鍵盤(g 音)の隣の鍵盤(a 音)を第 3 指で弾くように意識をもたせることでスムーズなポジション移動が可能になるのではないだろうか。ただし、その後の旋律を正しく弾くためには、第 1 指が f 音に移動できている必要がある。つまり、ここでも 5 本の指が 1 本ずつ順に鍵盤上に置かれた状態で手の形を保持したままポジション移動をすることが重要である。

曲名	ポジション	学習内容
かっこう	c~g=1~5	4 分音符と 2 分音符の長さ
かえるのがっしょう	c~f=1~4 e~a=1~4	3 度のポジション移動、親指の位置を意識, 追いかけっこ
ぷっかりくじら	e~a=1~4 c~g=1~5	歌を聴きながら合わせる
山のポルカ	① e~a=1~4 ② g~c=1~4	8 分音符、同音の連続
こぎつね	c~g=1~5 f~c=1~5	4 度のポジション移動
なべなべそこぬけ		伴奏
こぐまの二月	c~g=1~5	オルガンやキーボードなど、低音楽器、合奏(3 パート)
アイアイ	c~g=1~5	合奏(5 パート)

(表 2)第 2 学年の学習内容

・第 3 学年

〈学習の流れ〉

初めに「ドレミで歌おう」(p. 8-9)で指くぐり、指またぎ(第 3 指でまたぐ)を習得する。「海風きって」(p. 12)では、c 音～g 音のポジションで始まり g 音～ c 音のポジションへ移動する。ここで初めて 5 度のポジション移動を経験する。「ゆかいな木きん」(p. 28-29)では鍵盤楽器は 2 つのパートに分かれる。第 1 のパートは d 音～a 音のポジションで始まる。その後第 1 指 e 音、第 2 指 g 音となり、第 1 指と第 2 指の間を広げるポジションの後に第 2 指で指またぎをする。そのフレーズを c 音第 1 指で終えた後に d 音第 1 指のポジションに移動する。その後、e 音第 1 指高い c 音第 5 指のポジションに移動して第 2 指で指またぎをして終わる。第 2 のパートは伴奏パートで、低い g 音第 1 指と c 音第 4 指のみである。「パフ」(p. 52-53)では低音楽器として鍵盤楽器を使用する。第 3 指 c 音、第 1 指 g 音のポジションから始まる。この手の形は「ゆかいな木きん」での第 1 指 e 音、第 2 指 g 音と同じ手の形である。その後 2 回弾く e 音を、1 回目は第 5 指、2 回目は第 3 指で弾く。同音での指替えによって c 音第 1 指のポジションへ移動する。その後 4 分休符の間に 3 度の水平方向へのポジション移動で a 音第 1 指のポジションに移動し、その後 2 回の d 音で指替えをして c 音第 1 指のポジションに移動する。その後第 3 指 c 音、第 1 指 g 音のポジションに戻るために、e 音第 3 指、d 音第 1 指、c 音第 3 指の順で弾く。e 音から d 音へ移る際に指を一本飛ばして使用するために手の幅を狭くする動きが加わる。その後第 3 指での指またぎをして初めのポジションへと戻る。「エーデルワイス」(p. 68-69)では c 音第 1 指のポジションから第 2 指の下を第 1 指がくぐって e 音第 1 指 g 音第 2 指のポジションへと移動する。その後第 1 指が f 音になり、第 3 指で指またぎをして元のポジションへと戻る。「ミッキーマウスマーチ」(p. 80-81)では、g 音第 1 指のポジションから h 音第 1 指のポジションへと移動する。繰り返しの後の 2 括弧では、高い c 音第 2 指のあと e 音第 1 指、f 音第 3 指、e 音第 2 指、d 音第 1 指、a 音第 3 指、g 音第 2 指と続く。

つまり第 3 学年では、指くぐり、指またぎ、第 1-2 間を広げる動き、同音での指替えなど、多くの重要なテクニックを習得する。

〈指導上の注意点〉

指くぐり、指またぎは手首の柔軟性が求められるため、腕の脱力が必要になる。加えて、指がくぐった後、またいだ後すぐに 5 本の指が 1 本ずつ順に鍵盤上に置かれた状態になる必要がある。第 1 指と第 2 指間を広げるポジションでは、第 2 指から第 5 指の 4 本はこれまでと同様に指が 1 本ずつ順に鍵盤上に置かれた状態であることが重要である。このポジションで弾く際、「ゆかいな木きん」の第 5 小節からのように第 1 指から始まる場合と、第 13 小節からのように第 5 指から始まる場合とで手の用意の仕方に違いが出る。第 1 指から始まる場合は、初めから指を開いた状態で用意することになるが、第 5 指から始まる場合は初めから手を開いた状態で用意するとかえって弾きにくい。そのために第 1 指を使用する直前に指を開くことになると考えられる。親指を左へずらして第 1-2 指の間を開くように意識させる必要がある。手首の柔軟性も重要である。「パフ」では、指替えの前後で手の開き具合が変わる。手が開いた状態で始まるが、指替えの後は 5 本の指が 1 本ずつ順に鍵盤上に置かれた状態になる。この場合は指替えをした後に親指を通常の位置に戻すように意識させたい。指またぎをした後に手が開いた状態になる際には、第 1 指を使用する直前に親指を左へずらして第 1-2 指の間を開くように意識させる必要がある。「エーデルワイス」での指くぐり後の手の開き具合の変化は、指くぐり後の第 1 指を弾いた後すぐに第 1-2 指の間を開くように意識させる必要がある。そしてその後 f 音弾くまでの間で親指を通常の位置に戻しておく必要がある。「ミッキーマウスマーチ」で g 音第 1 指のポジションから h 音第 1 指のポジションへと移動する際は、「パフ」で習得した第 4 指と第 2 指の同音での指替えを意識すると良

いであろう。つまり、g 音第 1 指から c 音第 2 指へと移動する際に手の幅が変わらないように注意すべきである。2 括弧の高い c 音の後の e 音を第 1 指で弾く理由は、休符がないため素早く移動するためだと考えられる。続く f 音を第 3 指、その後の e 音を第 2 指で弾くことと、これまで習得してきた手のポジション移動から考えると e 音第 2 指とすべきであるが、高い c 音第 2 指から休符なしで e 音第 2 指に移動するのは困難である。そのため e 音第 1 指、f 音第 3 指としていると推測できる。この指の運びにより、「パフ」で習得した指飛ばしと手の幅を狭くする動きが加わることになる。その後の a 音は手のポジションから考えると第 5 指となるが、ここでは第 3 指で弾く。この意図は、D.S.後のポジション移動を容易にするためであろう。a 音を第 5 指で弾いた場合は続く g 音が第 4 指となり、D.S.後の高い c 音第 4 指へは 4 度のポジション移動となる。4 度のポジション移動は「こぎつね」で習得済みであるが、ここでは a 音を第 3 指で弾くことにより手の幅をこれまでよりも広く開く動きを習得する意図が読み取れる。これまで第 1-2 指間を開く際には鍵盤 1 つ分開くのみであったが、ここでは鍵盤 2 つ分開くことになる。この動きを用いることにより、D.S.後の高い c 音への移動を容易にすることが可能となる。

曲名	ポジション	学習内容
ドレミで歌おう	c~g=1~5 f~c=1~5	指くぐり(3 の下)、指またぎ(3 でまたぐ)
海風きって	c~g=1~5 g~c=1~4	5 度のポジション移動
ゆかいな木きん	① d~a=1~5 e,g~c=1,2~5 c,d=1,2 ② g,c=1,4	①1-2 を広げる(3 度)、指またぎ(2 でまたぐ) 2 度のポジション移動 ③ 低音部
パフ	g,h~e=1.2~5 c~f=1~4 a~e=1~5	指替え(5-3)(4-2)、指替え後の手の開き具合の変化、指飛ばし、指またぎ後の手の開き具合の変化
エーデルワイス	c~g=1~5 e,g~c=1,2~5	指くぐり(2 の下)、指くぐり後の手の開き具合の変化
ミッキーマウスマーチ	g~d=1~5 h~e=1~4	素早い移動、1-2 を広げる(4 度)

(表 3)第 3 学年の学習内容

・第 4 学年

〈学習の流れ〉

「いいことありそう」(p.10)で付点 8 分音符と 16 分音符を学び、16 分音符の速い動きを習得する。「楽しいマーチ」(p.20-21)では、g 音第 1 指のポジションで始まり、後半は e 音第 1 指のポジションで、第 2 指で fis 音を弾く。ここで初めて黒鍵を使用する。最後の 2 小節で第 4 指から第 2 指への同音指替えで元のポジションに戻る。「茶色の小びん」(p.50-51)では、主旋律と低音楽器を鍵盤楽器で演奏する。主旋律は、e 音第 1 指のポジションで始まり a 音第 1 指のポジションへ移動する。後半では、第 1-2 指間を広げる動きの後に第 2 指での指またぎをして初めのポジションへ戻る。低音楽器は、c 音第 1 指のポジションではあるが、第 1-2 指間を広げて、且つ f 音第 3 指、fis 音第 4 指、g 音第 5 指となっており、この部分は手の幅が狭くなる。その後 1 オクターヴの跳躍で g 音第 1 指のポジションへ移る。

「ジッパディードゥーダー」(p. 64-65)では主旋律と低音楽器を鍵盤楽器で演奏する。主旋律を担当する鍵盤ハーモニカのパートでは、e 音第 1 指のポジションで始まるが、第 3 指 g 音第 5 指が高い c 音で、第 3-5 指間を広げて 4 度を弾く。高い c 音の後はすぐに f 音第 1 指のポジションとなる。その後 3 度のポジション移動後すぐに第 1-2 指間を広げて c 音を弾いた後に c 音第 1 指のポジションになる。その後も目まぐるしくポジションが移動する。低音楽器のパートは、g 音第 1 指のポジションで始まるが、その後は指番号が付記されていない音があり、複数の運指が考えられる。「スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス」(p. 78-79)では鍵盤楽器の候補として、鍵盤ハーモニカ、木琴、鉄琴が挙げられている。この曲では半音階的順次進行で黒鍵を多く使用するため、手の幅が一時的に狭くなる。第 5 小節の高い c 音第 5 指からは下行半音階となっており第 6 小節の a 音が第 2 指となる。しかし、第 7 小節の a 音は第 3 指から始める必要があるため、同音での指替えによって白鍵上に指が順におかれた状態にする。この場合、一時的に手の幅が狭くなっているが、ポジションは移動していない。低音楽器にも同様の動きが多く出てくる。

つまり第 4 学年では、黒鍵を使用し、第 3-5 間を広げる動きなどを習得し、さらに前後の流れから最適な運指を考えられるようにする。

〈指導上の注意点〉

「楽しいマーチ」では e 音第 1 指、fis 音第 2 指となる。この場合、e 音第 1 指、f 音第 2 指のポジションよりも手全体を少し鍵盤の奥側へ移動させる方が弾きやすい。黒鍵は白鍵よりも鍵盤の奥に位置しているため、どの指で黒鍵を弾くかにもよるが、黒鍵を使用する際には鍵盤上での手の位置にも注意が必要である。白鍵のみで弾く場合と同じ位置に手を置いて黒鍵を弾く時にのみ指を伸ばして弾くことは、そこで手の形が変化してしまうことになり、その後の演奏に影響を及ぼす。黒鍵を使用する際にも、白鍵のみで弾く場合と同じ手の形で弾くことができる位置に手を置いて弾くことを心がけるべきである。「茶色の小びん」の低音パートの手の幅を狭くする部分は、ここでも黒鍵を弾く際の手の位置が重要なポイントとなる。黒鍵の直前の f 音第 3 指をやや鍵盤の奥で弾くことで、fis 音第 4 指が弾きやすくなる。それに続く 1 オクターヴの跳躍では、跳躍後すぐに指が 1 本ずつ順に鍵盤上に置かれた状態になることが必要である。「ジッパディードゥーダー」での第 3-5 指間を広げる際は、手首を柔軟にして手首を小指の方向へ動かすと弾きやすい。低音楽器の運指については、児童の実態に合わせて検討する必要がある。例えば、第 2 小節の運指については次の 2 つの案が考えられる。第 1 案として、c 音を第 1 小節と同じく第 4 指で弾いて次の e 音を第 5 指で弾く。この場合は第 4-5 指間を広げる必要があると共に、第 3 小節の f 音を第 5 指で弾くために第 5 指を連続で使用する必要があり、手の移動が加わる。第 2 案は、c 音を第 2 指、e 音を第 4 指で弾く。この場合は第 2 小節に入る際に第 1-2 指間を広げて 4 度を弾くことになるが、その後は第 3 小節の f 音まで鍵盤上に指が順番に置かれた状態となる。筆者は第 2 案を推奨したいが、どちらの案でもポジション移動や手の幅を変えることが必要であり、どちらが弾きやすいかは不明である。教科書では初めの c 音は第 4 指と指定されているが、おそらく最も容易なのは c 音を第 2 指で始める運指であろう。はじめから第 1-2 指間を 4 度に広げた状態で手を準備して c 音第 2 指 g 音 1 指とすることで、ポジション移動も手の幅を変える必要もなくなる。場合によってはこの運指も有効であろう。その後も至る所で複数の運指案が考えられる。この曲の運指案については、教師が児童の実態に合わせて選択するよりも、児童が前後の運指の流れを考慮しながら自ら見つけ出していくように指導したいものである。「ジッパディードゥーダー」や「スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス」では、これまでに習得したテクニックや様々な指の運びを駆使して弾くことになる。つまり、この曲の学習に入るまでに、ポジション移動や手の幅を変える動きに十分慣れておく必要があ

ると言える。

曲名	ポジション	学習内容
いいことありそう	c~e=1~3 f~c=1~5	16 分音符
楽しいマーチ	g~d=1~5 e(fis)~h=1(2)~5	黒鍵(2)
茶色の小びん	①e~h=1~5 a~e=1~5 ③ c,e~(fis) g ＝1.2~(4) 5 g~c=1~4	黒鍵(4)、3-5 を狭くする、1 オクターヴ跳躍
ジッパディードゥーダー	① e~g,c=1~3,5 f~c=1~5 c.e~a=1,2~5 c~e=1~3 a~e=1~5 d,f~h=1,2~5 d~g=1~4 g~c=1~4 ②g~d=1~5	①3-5 を広げる(4 度) ④ 各自で最適な運指を見つける
スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス	①e~g=1~3 d~f=1~3 f~c=1~5(半音階含む) e,g~c=1,2~5 ②g~d=1~5(半音階含む) g,c~f=1,2~5 d~a=1~5(半音階含む)	半音階的順次進行

(表 4)第 4 学年の学習内容

・第 5 学年

〈学習の流れ〉

当学年からは指番号の表記がない。「リボンのおどり」(p. 24)の低音楽器パートでは、指を一本ずつ順に鍵盤上に配置するポジションでは弾けないので、運指について工夫をする必要がある。「静かにねむれ」(p. 34-35)では鍵盤楽器 1 のパートで和音を弾く。和音はハ長調のⅠ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅴ7 の 4 種類である。鍵盤楽器 2 のパートはポジションの移動もなく、音も 3 種類のみで非常に易しい。「キリマンジャロ」(p. 40-41)では、鍵盤ハーモニカのパートの第 1 小節で e 音から高い e 音まで 1 オクターヴの幅に手を広げる。鍵盤楽器パートは 3 度の重音で始まり、後半では 6 度の重音が出てくる。低音楽器パートでは 1 オクターヴ分散を連続で演奏する。「威風堂々」(p. 60-61)では使用する楽器が指定されておらず、例示されているものを参考に選ぶように設定されている。楽譜上では重音で表記されているが、1 音ず

つ別々のパートになっている。「ギャラクシー～銀河をこえて～」(p. 72-73)「アフリカンシンフォニー」(p. 74-77)ではどのパートも、どのポジションで用意するか、どの指から始めると良いかを児童が考える。

つまり第5学年では和音の演奏に加えて、運指は各自で考えながら、これまで習得したテクニックを駆使して弾いていくのである。

〈指導上の注意点〉

指番号の表記がないので、運指は児童が自ら考えることになる。ここで合理的で弾きやすい運指を自ら導き出すためには、第4学年までに習得したテクニックが定着していることが重要であることは言うまでもない。「リボンのおどり」の低音楽器パートでは、指導書実践編の運指例では、初めのｃ音を第5指、続くｆ音を第1指のポジションで手を用意し、第2小節のg,h,d音は2,3,5指の順となっている。しかしながら、第3-5指で4度を経験しているこれまでの学びから考えると、第2小節は2,4,5指の順が最も合理的な指の運びであろう。いずれの運指でも手の幅が変化するため、手の幅を固定した方が弾きやすいと感じる児童には、f,g,h,c,d音に指を固定して弾く運指を提案しても良い。ただしこの場合は、広げにくい第2-3指間のみを広げることになり、手の状態としては多少の不自然さは否めない。「静かにねむれ」ではまず、ハ長調Ⅰの和音は1,3,5指で弾く。指を一本ずつ鍵盤上に配置する習慣が身に付いていれば、おのずとこの指を選ぶであろう。続いてⅣの和音は1,3,5指で弾く。ここでは第1-2間を広げる動きや手のポジションが定着していることが必須となる。そしてⅤの和音は 1,2,5 指で弾く。これも第1-2間を広げてⅣと同じ手の形となるが、使用する指が異なる。Ⅴと同じポジション同じ手の形で、1,4,5指で弾くとⅤ7となる。つまりこの曲は、ポジションは3種類、手の形は2種類で弾くことが可能であることがわかる。「キリマンジャロ」では、鍵盤ハーモニカのパートの第1小節が初めのｅ音を第1指、高いｅ音が第5指とするのが自然な運指あり、ここで1オクターヴの手の広がりを習得する。手の小さい児童には手首の柔軟性を利用して弾くように指導すべきである。鍵盤楽器パートは3度重音で始まり、運指が課題となる。通常、長い指を黒鍵に配置した方が弾きやすいので、gis,h音を第2,4指で弾くのが良いと思われる。その後の重音については第1,3指、第2,4指、第3,5指のいずれかを前後の音の流れから児童が選ぶように指導したい。ここでも、これまでの学びが定着していれば自然と3度は一本飛ばしの指を準備することが予想される。後半の6度の重音は全て第1,5指でポジション移動をしながら弾く。重音での演奏が困難な場合は上下を2パートに分けて単音で弾くように指導しても良い。低音楽器パートの1オクターヴ分散の連続は、第1指と第5指を交互に動かす以外の運指は考えにくい。音が変化していくため、演奏はかなり困難であろう。場合によっては低い音を左手、高い音を右手として両手で弾ことや木琴等の楽器を使用するなど、別の可能性を検討しても良いと思われる。この曲は、演奏に困難に伴う部分が多いため、児童の実態に合わせた指導が求められる。

曲名	ポジション	学習内容
リボンのおどり		運指を各自で考える
静かにねむれ	①c~g=1~5 c.e~a=1,2~5 h,d~g=1,2~5 ②f~c=1~5	和音Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅴ7
キリマンジャロ		①オクターヴ配置 ②重音(3度・6度) ③オクターヴ分散連続

ギャラクシー ～銀河をこえて～		運指・ポジションを各自で考える。
アフリカンシンフォニー		

(表 5)第 5 学年の学習内容

・第 6 学年

〈学習の流れ〉

「ラバーズコンチェルト」(p. 18-19)「風を切って」(p. 38-39)の 2 曲は使用する楽器の指定がない。これは、前述の通り学習指導要領に「楽器の特性を生かして選択すること」とあることから、児童がそのパートに相応しい楽器を選択することを意図していると推測できる。鍵盤楽器の指定がなされている曲は、「雨のうた」(p. 30-31)である。この曲では重音を一人で演奏するようになっている。また、「木星」(p. 70-71)や「コンドルは飛んで行く」(p. 72-73)の鍵盤ハーモニカや鍵盤楽器のパートはかなり音域が広い。

〈指導上の注意点〉

「雨のうた」の重音は運指が課題となる。合理的な運指として 2 つ考えられるだろう。第 1 に考えられるのは、初めの c, e 音を第 1・3 指で弾く案である。この場合、続く h. e 音も第 1・3 指で弾くことになり、第 1-2 指間を広げる動きによりほとんど同じ指で弾くことが可能になる。次に考えられるのは、c, e 音を第 2・4 指で弾く案である。この場合は、h 音第 1 指のポジションに手を準備すれば、ポジション移動をせずに弾くことができる。「木星」や「コンドルは飛んで行く」では、旋律がかなり広い音域にわたっているため、ここでも運指が課題となる。どちらの曲も a 音第 1 指で始めることは明らかであるが、その後の運指については何通りも考えることが可能である。これまで習得してきたテクニックを様々に組み合わせて弾くことになる。まさに、第 6 学年の終わりに相応しい、総復習ができる教材であると言えよう。

４，まとめ

鍵盤楽器の学習流れを概観した結果、各学年で習得すべき内容が明らかになった。第 1 学年では、音と音階や鍵盤の配置を理解したうえで、5 本の指を c 音～g 音の鍵盤上に用意して、その状態を保ったまま演奏できるように指導しなければならない。第 2 学年では、手のポジション移動を習得するが、この際、5 本の指が 1 本ずつ順に鍵盤上に置かれた状態で手の形を保持したままポジション移動をすることが重要である。そして第 3 学年では、指くぐり、指またぎ、第 1-2 間を広げる動き、同音での指替えなどを習得する。第 4 学年では、黒鍵を使用し、第 3-5 間を広げる動きなどを習得し、さらに前後の流れから最適な運指を考えられるようにする。第 5 学年・第 6 学年では和音や重音の演奏に加えて、運指は各自で考えながら、これまで習得したテクニックを駆使して弾いていく。ここで最も重要な点として、第 1 学年において、5 本の指を順に鍵盤上に用意してその状態を保ったまま演奏できるようになっておくことであろう。その後の学年で習得する様々なテクニックは、全てこの手の形がベースとなっている。第 2 学年でのポジション移動は、この手の形が保持できていなければ、移動後に正しい鍵盤に指が置かれていない状態となる。また第 3 学年以降で習得する指の幅を変えるテクニックや指替えにおいても、この手の形が保持できていなければ、その後正しい鍵盤に指が置かれていない状態となる。この手の幅を変えるテクニックが、第 5 学年での和音の演奏に繋がっており、運指を各自で考える際には、それまでに習得した合理的な手や指の動きが定着していることが前提となる。

教科書での学習の流れは非常に合理的且つ体系的に組み立てられており、理論上ではこの流れで学習を進めることで、基本的な鍵盤楽器の演奏テクニックは習得できるとともに、正しい運指の習慣を身に付けることも可能である。ただしそのためには、各曲での指導において重要なポイントを見逃さないことと、それぞれのテクニックが順に定着していくことが条件となる。実際の教育現場においては、器楽の学習のみを継続して行うことはなく、歌唱や鑑賞といった他の学習と併せて、限られた時数の中で計画的に学習が進められている。また、運指に留まらず様々な演奏技術を定着させるためには、個別指導が必要となることは容易に推測できるため、実際問題として一斉指導でだけでは合理的な運指の習慣を身に付けることは困難であろう。そのため、少しでも学習効果を高めるためには、本研究によって明らかになった各学年及び各楽曲における指導上の重要なポイントを教師が把握したうえで鍵盤楽器の指導に当たることが求められる。そして可能な限り児童一人ひとりの手や指の状態を把握するように努め、各テクニックの定着具合を確認しながら学習を進めることが必要である。

今後の課題としては、今回明らかになった指導上の重要なポイントを如何にして児童に伝えていくのか、また限られた時間の中で如何にして効率的に技術指導を行うのかといった、具体的な指導法について研究をする必要がある。正しい運指の習慣を身に付け、児童が演奏する楽しさや喜びを味わうことができるようになるための具体的な方策について、今後も検討していきたい。

参考・引用文献

・平塚菜津美・島畑斉(2016)「鍵盤ハーモニカの運指の定着を目指した授業実践研究」『島根大学教育臨床総合研究』15，島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センター，pp. 183-197
・奥田順也(2018)「小学校低学年における鍵盤ハーモニカの運指を指導するための学習プロセスの構築とその有用性に関する研究－授業実践から得られたデータを用いて－」『教育実践学研究』21，教育実践学会，pp. 51-75
・文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説　音楽編』，東洋館出版社
・小原光一ほか(2022)『小学生のおんがく 1』，教育芸術社
・小原光一ほか(2022)『小学生の音楽 2』，教育芸術社
・小原光一ほか(2022)『小学生の音楽 3』，教育芸術社
・小原光一ほか(2022)『小学生の音楽 4』，教育芸術社
・小原光一ほか(2022)『小学生の音楽 5』，教育芸術社
・小原光一ほか(2022)『小学生の音楽 6』，教育芸術社
・小原光一ほか『小学生のおんがく 1 指導書実践編』，教育芸術社
・小原光一ほか『小学生の音楽 2 指導書実践編』，教育芸術社
・小原光一ほか『小学生の音楽 3 指導書実践編』，教育芸術社
・小原光一ほか『小学生の音楽 4 指導書実践編』，教育芸術社
・小原光一ほか『小学生の音楽 5 指導書実践編』，教育芸術社
・小原光一ほか『小学生の音楽 6 指導書実践編』，教育芸術社